

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370225

研究課題名(和文) 夏目漱石の文芸と美術との相関 漱石文庫資料による実証的研究

研究課題名(英文) Interrelatedness of a Natsume Soseki's Literature and the Arts: Empirical Research from the Soseki Collection

研究代表者

仁平 道明 (NIHEI, MICHIAKI)

和洋女子大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：00042440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：夏目漱石の美術への関心、その文芸と美術との関わりについては、既に多くの研究があるが、その前提となる調査は十分とはいえない状況であった。研究代表者は、漱石文庫の美術雑誌“*The Studio*”等に見られる、漱石自身によるものと推測される剥ぎ取りの跡に注目し、そこにあったはずの絵、記事等を知ることによって、漱石の美術、特に西洋美術への関心の内実を実証的に明らかにすることができると考えた。調査の結果、Romilly Fedden等の多くの画家、芸術家や芸術思潮への関心がうかがえることが判明し、漱石の文芸の背景にあった美術への関心の多様さ、漱石の芸術についての視野の広さが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Much research already exists regarding Natsume Soseki's interest in art and the relationship between his literary work and the arts, but studies that form the groundwork for this research can hardly be said to be sufficient. The principle researcher focuses in on the parts that have been cut out, presumably by Soseki himself, from the arts journal “*The Studio*” and other pieces in the Soseki Collection. By understanding the pictures and articles that he removed it is possible to gain verifiable insight into Soseki's interests in art; and in particular, in Western art.

This study revealed his preferences for many painters, artists and artistic trends including Romilly Fedden, the varied interests in arts that formed a background to Soseki's literary works, and made clear the breadth of Soseki's perspective on the arts.

研究分野：日本文学

キーワード：夏目漱石 美術 文芸 東北大学 漱石文庫 美術雑誌 “*The Studio*” 剥ぎ取り

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 夏目漱石の文芸作品には、『三四郎』『草枕』等、絵画を中心とする美術が重要なモチーフとなっているものやそのイメージがその背景にあるものが少なくない。また直接、間接に絵画等への言及があるもの、それを背景としている表現は枚挙にいとまがなく、漱石研究における絵画等の美術の重要性はつとに認識されていた。

(2) しかしながら、芳賀徹『絵画の領分 近代日本比較文化史研究』(1984)、佐渡谷重信『漱石と世紀末芸術』(1984)、尹相仁『漱石と世紀末』(1994)など、その問題についてのこれまでの研究の多くは、漱石が留学中、帰国後にふれた西洋美術の中でも、特に世紀末芸術やラファエル前派(Pre-Raphaelite Brotherhood)との関わりを中心に論じたものであり、それらの研究で指摘されているものは、漱石が関心を持ち影響を受けたものの一部分にすぎず、東洋・日本美術との関わりについて不十分で西欧の美術に偏っていたというだけではなく、西欧の美術についても一部の画家、芸術思潮についての指摘でしかなかった。

(3) また、漱石の美術への関心とその文芸との関わりについて研究しようとするときに必須の手續きとなるはずの東北大学附属図書館の漱石旧蔵資料を中心とする漱石文庫の美術関係資料の調査も、一部について調査されてきたものの、多くの資料を直接調査して詳細に検討するような、系統的で十分な調査・研究が行われてきたとは言いがたい。例えば尹相仁氏は『漱石と世紀末』で、漱石の『それから』に言及のあるブラングウィン(Frank Brangwyn)の絵について、「漱石はそれを定期購読した『ザ・ステューディオ』の一九〇四年十月号(中略)に載った前掲の絵のカラー図版より見たに違いない。」とするのだが、実は漱石文庫の漱石旧蔵の『ザ・ステューディオ』(THE STUDIO An Illustrated Magazine of Fine & Applied Art)以下「The Studio」とする。の当該号のその部分(カラー図版)は、漱石によって剥ぎ取られたとおぼしく、存在しない。そしてそのことは逆に、漱石がその絵を見ていて深い関心を持ったということを示すものと考えられるべきであろう。尹相仁氏の著書の前掲のような記述は、漱石の美術への関心について、漱石旧蔵の資料を実際に精密に調査することによって実証し、明らかにする作業が、従来、十分に行われてこなかったと言わざるをえない状況にあることを示すものであろう。

(4) なお、日本近代文学作品の装幀にも大きな影響を与えた漱石の作品・作品集の装幀について、アールヌーボーの影響を見る見解が主流になっているが、橋口五葉・津田清楓等

による装幀は、それ以外の芸術思潮、美術の潮流の影響による部分が少なくない。橋口・津田等は漱石がロンドン等で入手した“The Studio”等の美術資料を示され、そこに掲載された絵画等の影響を受けているものであると考えられるが、それがどのようなものであったのかということも、本研究の調査によって明らかにしうるものと思われる。そのような問題についても本研究は資するところがあると考えられる。

(5) 以上述べたような研究状況を背景として、漱石文庫の美術関係資料の詳しい調査・研究が、漱石の文芸、文芸と美術との関わりを解明するための視座、手がかりとして重要な、意義あるものであり、またその詳しい調査・研究が現在必要とされていると考え、本研究を企図した。

## 2. 研究の目的

(1) 夏目漱石の美術、特に絵画への関心と文芸との関わりについては、前述したとおり、これまでに芳賀徹・佐渡谷重信・尹相仁氏等の研究のように、主として世紀末芸術やラファエル前派(Pre-Raphaelite Brotherhood)の影響が指摘されてきた。だが、それらの研究で指摘されてきたものは漱石が受容したものの一部に偏っていた。

(2) 東北大学附属図書館の漱石文庫資料のうち、漱石がロンドン滞在中だけでなく帰国後も一時の中断期間をはさんで購入し続けた美術雑誌“The Studio”、ロンドン滞在中に訪ねた美術館の図録、「渡航日記」等の未翻刻の部分にある画家との交流を示す資料等の詳細な検討を加えることによって、より広い範囲の美術との深い関わりがあったことが見えてくると考えられる。本研究は、漱石文庫の美術、特に西洋美術関係の資料の調査とそれを用いた漱石文芸との比較研究によって、漱石の美術への多様な関心と漱石文芸との関わりについて、実証的に解明することを目的としたものである。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、「研究の目的」に記したように、主として東北大学附属図書館蔵漱石文庫の西洋美術関係の資料を用いて、夏目漱石における文芸と美術、特に西洋美術との相関について、従来の研究が限定的な一部の美術、芸術思潮との関係の指摘にとどまっていたのに対して、さらに広い部分との関わりがあったことを、実証的に解明しようとするものである。

(2) そのために、本研究では、漱石が滞英中から購入し、さらに帰国後も一時の中断期間をはさんでロンドンから取り寄せて購読し続けた美術雑誌“The Studio”の調査、特に漱石によるものと考えられる剥ぎ取り部分

の調査、漱石が訪れた美術館の図録の内容調査等によって、漱石が特に深い関心を寄せた美術がどのようなものであったのかということを実証的に明らかにし、さらに漱石文芸に語られていることとの比較によって、漱石における文芸と美術の相関の内実、漱石文芸における美術の形象のありようを解明することとした。そのために、漱石文庫に現存する漱石旧蔵の“The Studio”を中心とする美術関係資料で剥ぎ取られているために欠落している部分が語る漱石の関心を、欠落部分のない資料の実物を入手し、比較、調査する作業によって、分析、考察する方法を用いた。

#### 4. 研究成果

(1) 研究代表者は、これまで十分な調査がされてこなかった東北大学付属図書館の漱石文庫に残る漱石旧蔵の“The Studio”について、まず基礎的な調査を行った。東北大学の「漱石文庫目録」には、「The Studio. Nos.93 - 280. Dec.1900 - July.1916. 165 numbers. (23 numbers, including those for 1903, wanting). 44v. 4° . . .」と簡略な書誌が記されているだけで、その記載からは、漱石文庫に残る漱石旧蔵の“The Studio”の最初と最後の号の巻・号及び刊行年月、冊数等をおぼろげにうかがい知ることができるだけであった。そこで、まず、漱石文庫の“The Studio”について、実物にあたって基礎的な調査を行い、漱石が購入を始めた時期、留学中のもので最後の号の刊行時期、帰国後に購入を再開した時期、漱石文庫の最後の“The Studio”の刊行時期、それぞれの期間で現存する号、現存しない号等、漱石文庫の“The Studio”の状況を把握する作業を行い、そのうえで一冊ごとに剥ぎ取りの跡を確認することにした。しかしながら一世紀以上経過した漱石旧蔵の“The Studio”は、漱石が入手してから現在に至るまでの保存の場所等の条件が必ずしも理想的とはいえないものであったためもあってか、劣化が甚だしく、帙から取り出してページをめくると表紙等が破損して小紙片が分離してしまうこともあるような状態で、(今後、漱石文庫の“The Studio”の調査にあたっては、当該資料が上記のような状態であることを考慮した扱いが求められる。)研究開始時に予想していた以上に調査に時間を要した。そのため研究期間を1年間延長して調査をすることになったが、それによって明らかにしえたことも少なくない。その結果明らかになった点を以下に記しておく。

(2) 漱石文庫の“The Studio”は、整理・保存のために作ったと思われる比較的堅牢な布貼り紙製の44の帙(製作時期不明)とそれとは別の新しいファイル1冊に入れられている。ファイル・帙とそれに入れられた“The Studio”は、発行順(巻・号順)に配列するこ

とを意図したものと思われるが、2番目のものから最後のものまでは前述したような帙入りであるが、意図されたと思われる配列の最初のものだけは当初他のものと同じ時期に布貼り紙製の帙に入れられていたものが後になって比較的新しい紙のファイルに入れ替えられていると思われる。(そのファイル・帙に入れられた“The Studio”は、中には、表紙がとれて区別がつかなくなったのか、裏表紙が無くなった他の号といっしょにされて帙等の背表紙の記載では一冊として扱われている号などもあり、確実に存在している巻・号、全体の正確な冊数を数えるだけでもまだ調査が必要な状態である。)

(3) 漱石文庫の“The Studio”の中で、表紙が残っていて、その表紙の記載から刊行の年月日、巻・号が確認できるもっとも古いものは、漱石がロンドンに来た1900年の翌年1901年1月15日(JAN. / 15, 1901)発行の第21巻・第94号(VOL.21 / NO.94)で、“The Studio”の.96から始まる2番目の帙の前にある新しい紙のファイルに入れられており、ファイルの背には「981.studio. Vol.21 94(1901)」とあって、紙のファイルにはこの1冊のみが入っているという表示になっている。このようなファイル・帙の整理によると、漱石文庫において現在整理された“The Studio”の第1冊目はこの号からはじまっていることになる。そのため、研究代表者は、中間報告として発表した「漱石の美術への関心 THE STUDIO の剥ぎ取られた絵」(『アナホリッシュ國文學』第7号夏 / 2014年8月 / 響文社)においては、「漱石文庫に残るTHE STUDIOで表紙が残っていて刊行の時期がわかるものでもっとも古いものは、前述した一九〇一年一月十五日発行のものであり、一九〇〇年発行の号は見あたらない。「滞英日記」に、「Studio 来ル」とあるのは渡英の翌年、一九〇一年(明治三十四年)十月十六日の記事である。一九〇〇年(明治三十三年)の「渡航日記」やその年の書簡中にはTHE STUDIOについての記述は見あたらない」と報告したが、その後の調査で、漱石文庫の現在の新しい紙のファイルでは背に「981.studio. Vol.21 94(1901)」と書かれていて1901年1月号(94)からとなっている“The Studio”が、実は、最初に作成された漱石文庫目録の通り1900年12月号(93)から存在することを確認した。紙ファイルの中には“The Studio”の裏表紙が無くなった1901年1月15日(JAN. / 15, 1901)発行の第21巻・第94号(VOL.21 / NO.94)が上にあるが、その下に表紙・裏表紙もない、かなりの部分が失われた“The Studio”があり、比較のために入手した“The Studio”との照合によって、それが漱石文庫の目録にはある“The Studio”93であること、この93が漱石文庫の“The Studio”に現在残っているもっとも古い号であり、漱

石がはじめて“ The Studio ”を入手したのも、ほぼこの 93 が発行された 1900 年 12 月と考えるとよいであろうことが判明した。(なお各帙の最初の一冊目に「東北帝国大学図書館」が昭和 19 年 2 月に受け入れたことを示す登録印が捺されているが紙ファイルの 94 にはそれがないことから、もとは登録印が捺された表紙等があった 93 が、その表紙等があった状態で帙に入れて整理されていたのだが、ある時期に表紙等が失われてから 94 の後ろにまとめられ、93 が存在しないものという判断で新しい紙のファイルの背に 94 の存在だけが記されることになったのであろう。)

(4) 漱石文庫の“ The Studio ”のもっとも古いもの、すなわち漱石が最初に入手したと考えられるものが上記の号であったことを確認した上で、整理すると、漱石が滞英中に購入したと考えられる最後の号は、漱石がロンドンを発った 1902 年 12 月の前月 11 月 15 日発行の第 27 巻・第 116 号(VOL.27 / NO.116)である。なお、最初に入手したと思われる 1900 年 12 月 15 日発行の第 21 巻第 93 号(VOL.21 / NO.93)からその号までの間に、漱石が購入してから第二次世界大戦中に東北帝国大学図書館に入るまでの間に失われたのか、もしくは東北帝国大学図書館に入ってから失われたのか、あるいはもともと漱石が購入しなかつたのか不明だが、一部欠号がある。そして帰国後のものは、漱石が東京にもどった明治 36 年(1903 年)1 月からしばらく間をおいて、丸善を通じて定期購入していた(このことは漱石文庫の“ The Studio ”には含まれていた丸善の納入伝票から判明)と考えられる、帰国の翌年の明治 37 年(1904 年)から大正 5 年(1916 年)までのもので、1904 年 2 月 15 日発行の第 31 巻・第 131 号(VOL.31 / NO.131)から 1906 年 7 月発行の第 68 巻・第 280 号(VOL.68 / NO.280)までの号である(この期間のものにも一部無い号がある)。以上の確認から、漱石は、ロンドンに着いた 1900 年 10 月の翌々月には“ The Studio ”を入手し、以後、1902 年 12 月にロンドンを離れる少し前まで購入を続け、帰国後は一時の中断の後、明治 37 年(1904 年)2 月発行の号から大正 5 年(1916 年)7 月発行の号まで丸善から定期購入(“ The Studio ”には含まれていた納品伝票の日付から、発行後約 80 日で漱石の手もとに届いていたことを確認)をしていたことが判明した。また、現在漱石文庫に残るものが漱石が入手したもの、さらにその後昭和 19 年に東北帝国大学図書館に入ったものの全てではないことも明らかになった。今後、漱石の“ The Studio ”の受容について考えようとするとき、上記の期間に入手したはずの“ The Studio ”にも、失われたもののあることを考慮すべきことを付言しておく。

(5) 前述したように、漱石が“ The Studio ”に深い関心を寄せ、“ The Studio ”に載った絵、記事によって知った画家や芸術思潮、その作品等が漱石の文学作品にさまざまなかたちで投影していたことは、従来指摘されているとおりである。特に、尹相仁氏が『世紀末と漱石』で、「それから」に見える「大きな画帖」の「ブランギン」の絵について、「大きな画帖」が“ The Studio ”のことで、「ブランギン」の「何処かの港の図」が「Frank Brangwyn, 1867-1956」(フランク・ブラングウィン)の「ロンドンの王立取引所(Royal Exchange)の装飾パネル“Modern Commerce”」で、「『ステューディオ』の一九〇四年十月号(The Studio, Vol.33, No.139)の“Studio-talk”欄に載った「この絵の複製」を「絵のカラー図版より見たに違いない」こと、「漱石が毎月届く『ステューディオ』を通してブラングウィンに「多大の趣味」を持つようになったという指摘は、その後の漱石と美術との関係についての研究に大きな影響を与えることになった貴重な成果であった。しかしながらその『世紀末と漱石』には、正確ではない記述、あるいは漱石文庫の“ The Studio ”について誤解をまねくかもしれないと思われる記述もなかったわけではない。あり、また下記のような視点から漱石旧蔵の THE STUDIO によって漱石の美術への関心をさぐる大切な手がかりを得る機会を失うことにもなりかねないと思われるようなことがないではない。

(6) 「それから」で語られているブラングインの絵は尹相仁氏が指摘したように“ The Studio ”の 1904 年 10 月発行の号(VOL.33 / No.139)に掲載されたものだが、実は漱石文庫に残る漱石旧蔵の“ The Studio ”の当該号にはその絵は剥ぎ取られていて存在しない。そのことは、漱石がその絵に関心をもち、「それから」執筆と模写(漱石はその絵の模写をしている。)のためにその部分を漱石が剥ぎ取ったということを示すものであり、また逆に、剥ぎ取りの跡が、漱石がその部分にあったはずの絵や画家、芸術思潮等にかんがりの関心を持っていたこと、漱石がどのような絵、画家、記事に関心を持ったのかということを知りたいという手掛かりになりうるものだとすることを考えさせるものである。(なお、ソウル大学で漱石研究について尹相仁氏と直接話をしたときに聞いたところによれば、東北大学漱石文庫を二度にわたって調査した折には漱石旧蔵の“ The Studio ”を直接確認する時間がなく、他機関のものによってブラングウィンの絵を確認したため、その絵が剥ぎ取られていたことは知らなかった、ということであった。そのため、その絵の“剥ぎ取りから漱石の関心をさぐる”、というところに研究が展開しなかつたものと思われる。)前述したように研究代表者は、その剥ぎ取りの跡の調査によって、

漱石の小説・随筆・評論・書簡・日記等に言及がないものでも、漱石の関心の所在を実証的に解明することが可能になるのではないかと考えた。そのような発想を本研究の出発点として、漱石旧蔵の“The Studio”を実際に1頁ごとに確認し、剥ぎ取りの有無を確かめ、剥ぎ取りのない“The Studio”の当該号を入手して比較することによって、漱石が剥ぎ取った絵、記事等がどのようなものであったのか、漱石がどのような絵、画家、芸術思潮等に関心をもったのかということ、明らかにしようとした。

(7) その漱石旧蔵の“The Studio”の剥ぎ取りの調査の結果、まず剥ぎ取りのあるものが時期によって異なること、剥ぎ取りが目立つ時期等が判明した。すなわち、漱石が留学中(1900年～1903年)から購入し、中断期間をはさんで、帰国の翌年の1904年2月発行の号から亡くなる1916年まで定期的に購読していた号のうち、剥ぎ取りは留学中のものでは稀で、1904年8月発行の137から目立つようになること、それが漱石が“The Studio”の絵を模写したのもある水彩の絵を描いていた時期の号に多く見られた。ただ、それが実際に小説の中で言及されたり、形象化されたのは、たとえばブラングウィンの絵の場合のように、それよりも後になってからのことが少なくなかった。(明治41年に書かれた「三四郎」に出てくるターナーの松の絵と関わるのではないかと考えられるものがロンドン滞在中に入手したと思われる美術館のカタログ中に見られるものであることも、ブラングウィンの絵の場合と同様である。)漱石の西洋美術の受容は、そのような事実からみて、おそらくその作品をはじめて見てから時間をかけて熟成していく、ということかたちで行われることが少なくなかったのではないかと考えられる。

(8) そして本研究の調査の結果知り得たもっとも重要なことは、剥ぎ取られた部分にあった絵や記事は、従来重視されることが多かったラファエル前派(Pre-Raphaelite Brotherhood)や世紀末芸術等に関するものは少なく、それよりもさらに広がりをもつものであったことである。例えば、剥ぎ取られたページにあったはずの絵、画家、芸術思潮等に関する記事等を、剥ぎ取りのない“The Studio”との比較によって確認してみると、そこには、これまでに漱石が関心を寄せていたことが主張されているラファエル前派(Pre-Raphaelite Brotherhood)や尹相仁氏が指摘したFrank Brangwyn等に加え、Romilly Fedden等さまざまな画家の絵や、それに関する記事があり、漱石の西洋美術に対する関心は、予想以上に広く、多様なものであった。このように、多くのことが漱石文庫の“The Studio”の調査から判明し、漱石の文芸の背景、視野の広さが明らかになっ

た。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

仁平 道明、漱石の美術への関心  
THE STUDIO の剥ぎ取られた絵、  
『アナホリッシュ國文學』、響文社、査読無、  
第7号、2014、pp.98-107

〔学会発表〕(計5件)

仁平 道明、夏目漱石と美術雑誌“THE STUDIO”、フォーラム・ディスカッション《日本文学と美術》、台北城市科技大学日本研究センター、台北城市科技大学(台湾・台北市)、2016

仁平 道明、夏目漱石のイギリス留学と美術雑誌 THE STUDIO、市川文学ミュージアム講演会、市川文学ミュージアム(千葉県市川市)、2016

仁平 道明、漱石のイギリス留学とその前後 熊本・倫敦・東京、シンポジウム 漱石の心と思想、熊本県立大学文学部、熊本県立大学(熊本県・熊本市)、2015

仁平 道明、異文化体験としての留学 夏目漱石のイギリス留学とその後、<日本文学・言語・文化>国際研究フォーラム 文芸と教養、文藻大学日本語文学系、文藻大学(台湾・高雄市)、2015

仁平 道明、漱石と美術雑誌『ザ・ステューディオ』(“The Studio”)、台湾大学日本語文学系講演、台湾大学(台湾・台北市)、2014

〔図書〕(計1件)

仁平 道明、夏目漱石芥川龍之介論考、武蔵野書院、2017(発行確定)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁平 道明 (NIHEI, Michiaki)

和洋女子大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：00042440

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )